

※兵庫県立川西明峰高等学校 長澤和弥教頭先生に同校の特色ある学校設定科目「国際情報Ⅰ及びⅡ」の授業について、ご紹介願えないかと依頼したところ、ご多忙にもかかわらずお引き受けいただいた。特別寄稿として皆様に紹介する。

学校設定科目「国際情報Ⅰ・Ⅱ」
スカイプを用いて海外の学校との交流を行うー
兵庫県立川西明峰高等学校 教頭 長澤 和弥

I. はじめに

本校の学校設定科目であり、「特色選抜入試」を経て入学した「国際情報類型」の生徒が履修する「国際情報Ⅰ・Ⅱ」では、インターネットを利用する無料テレビ電話ソフト Skype（スカイプ）などを用いて、オーストラリア・タスマニア州にある姉妹校2校を含む海外の学校との交流を行っている。本稿では、「国際情報Ⅰ・Ⅱ」について紹介する。まず、これらの学校設定科目の詳細（シラバス）について記し、それに続いて、特徴的な授業活動等について述べることとする。

II. 学校設定科目「国際情報Ⅰ」のシラバス

1. 教科等：教科「人間」（2単位）
2. 授業形態：一斉授業。必要に応じペアワークとグループワーク。講義および演習
3. 選択条件：国際情報類型の2学年の生徒全員が履修する。（平成25年度は27名）
4. 使用教材：使用テキストを適宜指示する
5. 担当教員：週2時間のうち1時間は、ALTとの TT(team teaching)。もう1時間は、日本人英語教員単独の solo teaching
6. 科目の到達目標
 - ・ ICT 機器を積極的に活用するためのスキルを身につける。
 - ・ 英語を使っての実践的コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の向上をめざす。
 - ・ 国際交流を通して、異文化に対する理解を深める。
7. 科目の特色・内容

海外とのテレビ会議や電子メールを通じた情報交換、文化の交流により、ICT 機器を利用した実践的英語運用能力、コミュニケーション能力及びプレゼンテーション能力の向上を目指す。
8. 学習の計画（年間指導計画）

月	単元名	学習内容	評価の観点・評価規準
4 5 6 7	入門！英語で E-mail 英語で交流ははじめの一步	<ul style="list-style-type: none"> ・ E-mail の基本（設定方法、「ネチケット」、著作権など） ・ 自己紹介（テキストを使った作文、E-mail での作文、クラス内生徒同士での送受信、海外との送受信） ・ 受信した英語の紹介と新たな話題の発掘 ・ アイコンタクト、発音、発声 ・ テキストを使用し、的確な英文を書くための作文練習 ・ e-learning 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人情報や著作権などの取り扱いについて適切に判断する。 ・ Web 利用を積極的に行い、必要な情報を得ることができる。 ・ ICT 機器を活用して、伝えたい内容を分かりやすく表現しようとする。 ・ 身近なことを、相手に正しく伝える英文を書くことができる。
9 10 11 12	英語でプレゼンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイントのテーマ設定と情報収集 ・ 研究テーマの情報収集（文献、E-mail、Web 検索など）、外国と日本の比較・対照、資料作成 ・ パワーポイントの作成とクラス内発表 ・ テキストを使用し、情報の比較・対照の英文を書く ・ e-learning 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受信した E-mail を正しく理解することができる。 ・ 入手した情報を比較・検討し、その内容を英語で表現することができる。 ・ 効果的なパワーポイントを作成し、聴き手の興味・関心をひきつけるようなプレゼンテーションができる。 ・ プレゼンテーションの内容を聴き取り、相手が伝えようとしていることを正しく理解することができる。
1 2 3	海外の高校生とのネット上の交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ E-mail 送受信 ・ 英語で Web 検索 ・ テレビ会議システムを使った双方向の英語実習 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アイコンタクト、発音、適切な音量、明瞭な発声により、自分の考えをより効果的に相手に伝えることができる。 ・ グループワークに積極的に参加し、問題解決に協力して取り組むことができる。 ・ e-learning に積極的に取り組んでいる。 ・ テレビ会議システムを使った交流に積極的に参加している。

9. 評価の観点（評価の規準）

関心・意欲・態度	情報通信ネットワークを活用して、英語による効果的なコミュニケーションを行うことができる。
思考・判断	目的に応じたコミュニケーションを行うために、情報通信ネットワークを適切に活用するとともに、場面にふさわしい表現を適切に使うことができる。
技能・表現	コミュニケーションの目的に応じて、情報通信ネットワーク上のソフトウェアを効果的に活用し、情報の内容を英語で正確に相手に伝えることができる。
知識・理解	情報通信の効果的な運用法を理解しており、外国の人々とコミュニケーションを図るうえで必要となる言語運用能力を持ち、風俗・習慣や文化的な違いを理解している。

Ⅲ. 学校設定科目「国際情報Ⅱ」のシラバス

1. 教科等：教科「人間」（3単位）
2. 授業形態：一斉授業。必要に応じペア・ワークとグループ・ワーク。講義および演習
3. 選択条件：国際情報類型の3学年の生徒が選択することができる。（平成25年度は20名）
4. 使用教材：独自の教材を使用
5. 担当教員：週3時間のうちの2時間は、ALT＋日本人英語教員2名＋日本人情報教員1名の計4名でのTT。残りの1時間のうちの年間15時間は、ALTの代わりにインドネシア語を教える特別非常勤講師となり、計4名でのTT。それ以外の時間は、日本人英語教員2名＋日本人情報教員1名の計3名でのTT。
6. 科目の到達目標
 - ・様々な国際問題に目を向けるとともに、自国の文化を再認識し、諸外国に発信する姿勢を育てる。
 - ・国際交流を通して、異文化に対する理解をさらに深める。
7. 科目の特色・内容

「国際情報Ⅰ」に引き続き、海外とのテレビ会議（スカイプ）や電子メールを通じた情報交換、文化の交流を行う。また日本と外国の文化の比較等に関する課題研究とその発表等も行う。
8. 学習の計画（年間指導計画）

単元名	学習内容	評価の観点・評価規準
海外の高校との交流 (36時間)	電子メール、テレビ会議システムによるオーストラリア・タスマニア州の Rosney College との交流など、ICTを活用した交流 ・的確な英文を書くための作文練習 ・アイコンタクト、発音、発声 ・テーマを設定した意見交換活動 ・日本の伝統文化の再認識、情報発信 インドネシアの高校（タンパクシリ南第一高校）との日本語交流、及び日本語教材コンテンツの作成	<ul style="list-style-type: none"> ・受信した E-mail を正しく理解することができる。 ・テーマに沿った内容を英文で表現し、相手に正しく伝えることができる。 ・アイコンタクト、発音、適切な音量、明瞭な発声により、自分の考えをより効果的に相手に伝えることができる。 ・テレビ会議システムを使った交流に積極的に参加している。
e - ラーニング (18時間)	テキスト「iZONE」を使用した英文読解	<ul style="list-style-type: none"> e-learning に積極的に取り組んでいる。 ・英語による Web ページを積極的に利用し、必要な情報を得ることができる。 ・まとまりのある英文を読み聞きし、理解することができる。
課題研究、小論文、発表 (21時間)	各自のテーマによる課題研究とその発表 ・外国の文化を知る（海外の論文等を読む、テーマについての考察） ・国際社会の諸問題の認識 ・海外で日本を紹介している英文の読解	<ul style="list-style-type: none"> ・英語による Web ページを利用し、必要な情報を得ることができる。 ・入手した情報を比較・検証し、その内容をまとめ、発表することができる。 ・テーマに沿った内容を相手に正しく伝えることができる。 ・グループワークに積極的に参加し、問題解決のために協力して取り組むことができる。
情報発信 (30時間)	自国の文化を知って、他国へ紹介する（プレゼンテーション、ホームページ作成） ホームページ作成のための画像作成と HTML タグ入力等 著作権について	<ul style="list-style-type: none"> ・個人情報や著作権などの取り扱いについて適切に判断する。 ・ICT 機器を活用して、伝えたい内容を分かりやすく表現しようとする。 ・身近なことを相手に正しく伝える英文を書くことができる。 ・効果的な資料を作成し、聴き手の興味・関心をひきつけるようなプレゼンテーションができる。 ・プレゼンテーションの内容を聴き取り、相手が伝えようとしていることを正しく理解することができる。 ・グループワークに積極的に参加し、問題解決のために協力して取り組むことができる。

9. 評価の観点（評価の規準）

関心・意欲・態度	情報通信ネットワークを活用して、積極的に効果的なコミュニケーションをとることができる。また、国際社会の諸問題に関して理解し、発表・発信しようとする。
思考・判断	目的に応じたコミュニケーションを行うために、情報通信ネットワークを活用することをふまえた言語の機能や、場面にふさわしい表現を適切に使うことができる。
技能・表現	コミュニケーションの目的に応じて、情報通信ネットワーク上のソフトウェアを効果的に活用し、情報の内容を英語で正確に相手に伝えることができる。
知識・理解	情報通信の効果的な運用法を理解しており、外国の人々とコミュニケーションを図るうえで必要となる言語運用能力を持ち、風俗・習慣や文化的な違いを理解している。

IV. 「国際情報Ⅰ」の特徴ある授業活動

1. 電子メールを使った海外の生徒との交流

2年生が履修する国際情報Ⅰでは、海外の生徒との電子メールによる交流に力点を置き、毎週2時間の授業のうち、約半数近くをこの活動に充てている。電子メール実習授業の担当者は、ALTとの日本人英語教員の2名となっており、ティームティーチングを行っている。

電子メールは、まずはクラス内の生徒同士で送受信し、次に海外の相手宛に実際に送る。その際、自分の相手生徒だけでなく、双方の担当教員にもCCにて同報する。これにより、担当教員は、生徒たちのやりとりの内容を知ることができる。

電子メールを送受信する海外の相手は、オーストラリア・タスマニア州にある本校の姉妹校2校（女子高校と男子高校）である。男子は男子高校生、女子は女子高校生とペアを組み、年間同じ相手と電子メールのやりとりを行う。現実の問題点として、特に男子高校生から、時々メールの返事が来ないことがあげられる。また、オーストラリアの学校が相手のため、11月以降の時期（年度末・年度初め）の交流ができないこともある。

2. スカイプを用いた活動

2年生の「国際情報Ⅰ」では回数が限られるが、姉妹校の生徒とスカイプで交流する活動を行っている。時期は毎年9～10月である。夏休み隔年にお互いを訪問しているので、中にはその時に直接出会った生徒とスカイプでやりとりする生徒もいる。姉妹校2校（男子高校と女子高校）は、徒歩でほんの数分の近い距離に位置しているので、先方は、スカイプの授業の時には、よりICT設備の整った学校（男子高校）に集合する。「国際情報Ⅰ」での姉妹校とのスカイプ実習は、個々の生徒同士ではなく、教室同士の交流となる。

言うまでもなく、日本とオーストラリアは時差が少なく、双方の授業時間帯に無理なく交流が可能となる。また、両国ともにインターネット環境は安定していて十分な帯域を使用できるので、インターネットのインフラが原因で通信に支障が出ることは全くない。しかし、この点、後述のように相手国によっては、安定した通信環境を常時得られない場合もある。

「約束時間」に相手もスタンバイしており、無事に相手とつながると、スムーズな映像と音声により、ストレスなく対話ができる。正に「テレビ電話」であり、ほんの十年ほど前には、このストレスのない環境を得るのに随分苦勞したことがウソのようである。

3. iZone を利用した学習

iZoneとは、いわゆるe-learningが可能なサイトである。登録済みの生徒は、ここにログオンして各自で自分のペースで学習ができる。国際情報Ⅰでは、一定時間、生徒にこのサイトを使った学習を課している。また、このiZoneは、3学年の国際情報Ⅱでも引き続き使用する。

4. 英語によるプレゼンテーション

基本的な活動であるが、ウェブ上での情報収集と英語でのプレゼンテーションを系統立てて学習する授業は、本校では、この「国際情報Ⅰ」が最初である。また、言うまでもなく、この授業では初期段階で、電子メールやウェブサイトの基本と留意点、著作権などについても学ぶ。

V. 「国際情報Ⅱ」の特徴ある授業活動

1. 生徒20名に対して5名もの担当教員

平成25年度現在、国際情報Ⅱを選択している生徒の数は20名であるが、担当教員は5名いる。1回の授業あたり、最大4名もの教員が教室内にいて指導を行っている。生徒5名に対して教員1名という恵まれた環境になる。週3時間の担当教員の割り振りは次のとおりである。

水曜日：ALT 1名、日本人英語教員2名、日本人情報教員1名

木曜日：ALT 1名、日本人英語教員2名、日本人情報教員1名

金曜日：日本人英語教員2名、日本人情報教員1名が基本だが、年間15時間は、インドネシア語を指導する特別非常勤講師も加わる。

これだけ多くの担当教員がいるので、クラスを10名ずつに2分割しての指導が容易である。実際には、「ALTとのTT授業」と「情報教員によるICTの授業」のような内容で分割して授業を行っている。この場合、日本人英語教員は2名いるので、授業内容によって、どちらのクラスにもTTに入れる。分割しない授業の場合、4名ものフルタイム教員が教室内にいるので、生徒の質問等に対して、非常にきめ細やかな対応が可能となる。

2. スカイクを用いて海外の学校と実習

「国際情報Ⅱ」では、スカイクを利用した海外の学校との交流が大きな特徴となっている。相手校は2校あり、そのうちの1校は、オーストラリア・タスマニア州にある Rosney College である。この公立学校は、本校の姉妹校ではないが、姉妹校2校と同じ町（州都ホバート）にあり、立地的にも姉妹校2校と近い。

この学校で日本語を勉強している学生たちと本校生がスカイクで交流をする。従って、相手校にしてみれば、「生の日本語」を聞ける機会である。言うまでもなく、本校生にとっては「生の英語」、それも同年代の若者の英語を聞ける機会であり、話題もお互いに身近なものとなることが多い。なお、タスマニア州の college とは、実業的な科目をも教える教育機関である。

ロズニー・コレッジとの交流頻度は、オーストラリアの年度末までの期間、平均月に1回程度となる。年度初めの4月や、夏休み中の8月にはスカイク実習は行われませんが、平成25年度の場合、6月には2回の実習を行っている。このスカイク実習では、生徒は各自のノートパソコンを用いて、「個人対個人」の対話をする。毎回のスカイク実習に先だって、各回のテーマに従って両校で事前準備をして交流に臨む。

もう1校の相手校は、インドネシア・バリ島にある高校、タンバクシリン第一高校である。この学校とのスカイク実習の頻度は、原則として年間2回、5月頃と11月頃となる。スカイク実習中、相手校の生徒たちとの対話では、日本語かインドネシア語を用いる。この交流のためにインドネシア語を教える特別非常勤講師（日本在住のインドネシア人女性）を任用し、年間15時間、本校生にインドネシア語を指導している。

インドネシアとのスカイク実習は、「教室対教室」で行う。相手校の生徒は、日本語を勉強している生徒ばかりである。これらの相手校の生徒たちのために、2回目のスカイク実習で本校の生徒たちは、カメラの前で「寸劇」を演じてみせる。この寸劇とは、たとえば「買い物の場面」などで、インドネシアで日本語を学んでいる生徒たちにとっては、正に「生の日本語の会話」を見聞きできる貴重な機会となるのである。

「国際情報Ⅰ」の項で書いたように、現在の日本では安定したインターネット環境を容易に得ることができるが、インドネシアでは、必ずしもそうではないようである。要するに、通信が途切れ気味になったり、長時間接続できなかつたりすることが多い。最悪の場合には、その日は中止（延期）となることさえある。これが、ICT機器を利用した海外交流の大きな問題の一つであるが、「国際情報Ⅱ」では、毎時間情報の教員も指導するので、機械的なトラブルが発生しても、最短時間で対応が可能となる。

3. 課題研究

「国際情報Ⅰ」に引き続き、「国際情報Ⅱ」でも英語によるプレゼンテーションが指導される。それに加え、「国際情報Ⅱ」では、全員に「課題研究」が課せられる。そのテーマは、「国際情報委員会」（各教科主任が中心の委員会）のメンバー全員によって提示され、その中から生徒が選択する。自分が提示したテーマが選択された委員（教員）は、課題研究に関しては、テーマを選択した生徒の担当者となる。

テーマは、原則として「国際比較」に関わるものと規定しているが、当然ながら、それぞれの委員（教科）によって着眼点は異なるので、興味深いテーマも出てくる。今年度実際に生徒に選ばれたテーマの中から、いくつかを記してみる。

「遊牧民の食文化（モンゴル）」、「社会保障制度の比較（年金等）」、「保育施設に関する国際比較」、「西洋音楽と日本音楽の違い」、「風土と衣服文化」、「世界の遊び」、「世界の教育制度」

生徒の作業は、放課後等の自主的な時間のほか、授業中としては、原則として金曜日の特別非常勤講師による授業がない時

間を割り当てている。課題研究の年間計画の概略は次のとおりである。

- 4月 国際情報委員会の委員が各自2テーマずつを提示
生徒はそこから1テーマを選ぶ。(他の生徒と同じものは選べないので重複はない)
- 4～5月 生徒は選んだテーマを提示した教員に会ってテーマの趣旨等を聞く。
夏休みまでの間に再度会い、より詳細を打ち合わせ、指導を受ける。
- 6月 進捗状況についての発表会
- 10月 中間発表会
- 11月 発表会

VI. 本校の入試や類型との関わりと今後

本校では、本県の他の多くの県立高等学校と同様、「特色選抜入試」を実施している。これは、3月の「学力検査」（一般入試）より1ヶ月早い2月に、作文と面談を中心として選考を行う入試である。中学生は、各高等学校の「類型」の内容を見て志願校を決める。

本校の場合、特色選抜入試では、「国際情報類型」として募集している。名前から想像できるとおりであり、英語をはじめとした語学を学ぶだけでなく、ICT機器を活用して海外と交流を行い、「グローバル・マインド」をはぐくむことを学校目標としている。本県では、平成27年度に「通学区域再編」が実施され、長年の16学区が5学区に変わる。これを機に、学校の改革を計画する県立高校は多く、本校では、この国際情報類型を更に推し進め、「グローバル・キャリア類型」（仮称）として、一層「グローバル人材」の育成を目指すこととしている。

本校では、2・3学年で、「自己探求」、「国際情報」、「自然科学」という3つの「類型」に分かれる。名称が全く同じなのでかえってややこしいが、特色選抜入試（国際情報類型）で入学した生徒は、自動的に2・3学年では「国際情報類型」となる。「かえってややこしい」というのは、特色選抜入試で入学した生徒は、入学後に必ずしも「同名の類型」を選択する必要はないからであるが、他の多くの県立高校と同様、平成25年度現在の本校では、そのようになっている。なお、逆に一般の「学力検査」で入学してきた生徒が、2・3学年で「国際情報類型」を選択することは可能である。

今回紹介した「国際情報Ⅰ」は、2学年の「国際情報類型」の生徒全員（特色選抜入試で入学した生徒全員と一般入試で入学後に希望してこの類型を選択した生徒）が履修する。他の類型の生徒は履修することはできない。3学年の選択科目である「国際情報Ⅱ」についても同様であるが、こちらは必ずしも全員が選択する必要はないのが違いである。しかし、現実には、国際情報類型の生徒の大多数が選択している。

今回紹介した学校設定科目、国際情報Ⅰ・Ⅱは、本校の国際情報類型（入学後の類型）の中核をなすものである。今後、（入試の）類型の変革に合わせて内容を吟味し、一層「グローバル人材」育成の一助となるものになりたいと考えている。

参考文献

Medgyes, P. (1992). Native or non-native: Who's worth more? *ELT Journal*, 46(4).

The Korea Times (2008-12-28). Non-Natives Can Become English Teachers, Retrieved Jan. 1, 2013, from http://koreatimes.co.kr/www/news/nation/2008/12/113_36881.html